



映画『ノー・アザー・ランド』

パレスチナというトピックが注目されがちですが、今回紹介する『ノー・アザー・ランド』はこれまであまり注目されてこなかった、ヨルダン川西岸地区で日常的に起こっていることをテーマとしたドキュメンタリーです。ヨルダン川西岸地区の現状については何度も聞く機会がありましたが、やはり映像で見るとインパクトが違います。突然自分の家や地域の学校が壊され、先祖代々住んできた土地が奪われる。自分の土地を守ろうとすると暴力を受け、銃撃されることすらある。このような理不尽なことが、2023年10月以前から日常的に起こっているということを改めて痛感しました。映画の中でイスラエル人青年ユヴァルが、この映画を共同制作したパレスチナ人青年パーセルに、いつかイスラエルに訪ねてきて欲しいと話しているシーンがあります。これだけ聞くと、友人同士のたわいもない会話に聞こえますが、それを実現できる未来を描けないのが現状です。そんな日が来ることを願いながら、パレスチナのために今できることをやっていたいかなければいけないと思わせる映画でした。

黒岩竜太(くろいわ・りゅうた/ATJ)

公式サイト▶



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
パランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <https://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人APLA 🔍

人から人へ
PtoP
ピープル
NEWS
vol.68
2025.06



特集

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み

哀れみではなく正義を、涙ではなく声を



分離壁に描かれたネルソン・マンデラ(ベツレヘム)

おみやげ オブザワールド

ピナン

パプアのお土産事情

今回は、インドネシア・パプア州のカカオ生産者協同組合のみなさんに、パプアのお土産事情について聞いてきました!

最初に組合員のマルティンさんにパプアの人はどんなものをお土産にしているのか聞いてみたところ、「お土産とか用意できていなくて申し訳ない…」と誤解されてしまい、慌てて「そういうつもりで聞いたわけじゃないですよ」と訂正する一幕も(笑)。マルティンさんによると、パプアでは家族や知人へのお土産として、お米や魚(川魚が多い)などの食材を持って行き、それらを料理してみんなで食べるのが一般的だそう。パプアの大自然の中で助け合いながら生活している彼らしい文化ですね。

組合で主にカカオ豆の買い付けを担当しているジョンさんにも伺ってみました。ピナンというヤシ科のピンロウの種子(口の中で石灰と一緒に噛むことでタバコのように嗜むもの)を組合に未加入のカカオ生産者へのお土産として持って行くこともあるそうです。ピナンを楽しみながらカカオの話をつつ、組合の活動のアピールや勧誘にもつなげる営業ついで、商談アイテムとしてもお土産を活用しているそうです。



ジョンさん

菅野桂史(すがの・けいし/ATJ)

食事の風景をWEBサイトで紹介しています。

今日の美味しいゴストウ!

アグスさんちのおもてなし

アウグスト・パプティスタ・ワレスさんアグスさん
12人家族、東ティモールエルメラ県メルトゥト集落

アグスさんはAPLAと長年一緒に活動している地域のリーダーの1人です。お家を訪問すると、必ず手作りの軽食とエルメラのコーヒーやハーブティーでもてなしてくれれます。バナナチップス、揚げたキャッサバ、日によってはクッキーも加わります。これらのスナックの味をキュッと引き締めるのが、ツボクサと唐辛子の和え物!東ティモールの食事には、唐辛子とハーブやエシヤロット、にんにくなどを和えたものがよく一緒に出てきますが、ツボクサを使うことは珍しいです。APLAの現地協力団体であるパーマティル主催のパーマカルチャー(*や環境保全について学ぶ活動に参加する中でツボクサが食べられる植物だと知り、食事に使うようになったそうです。アグスさんの家の畑にある池のそばにもたくさん生えているので、摘みたてが楽しめます。

*持続可能な農業と文化を育てデザイン手法

松村多悠子(まつむら・たゆこ/APLA)





特集 哀れみではなく正義を、涙ではなく声をforパレスチナ



ガザ地区停戦後、西岸地区で本格化する軍事攻撃

2023年10月に始まったガザ地区でのイスラエル軍によるジェノサイド(集団殺戮)の影響を受け、オリーブオイルの産地であるヨルダン川西岸地区でもイスラエル軍や入植者による暴力が激化しています。2024年1月から2025年1月の僅か1年間で、102人の子どもを含む555人がヨルダン川西岸地区で犠牲となりました(*1)。

2023年10月以降、オリーブ生産者は耕作や剪定作業のため、自由にオリーブ畑に行き来できない状況が続きました。特に収穫シーズンは規制が厳しくなり、分離壁の反対側にある畑に行くことはイスラエル軍に許可されませんでした。入植地に近い畑も入植者による暴力の不安があるため近付けず、2024年10-12月の収穫期も広い範囲でオリーブが収穫できなかつたと推測されています。入植者による農民への暴力行為は、毎日数百件発生し、2023年10月以降、52,300本のオリーブの木が根こそぎにされたと報告されています(*2)。

2025年1月19日、ようやくイスラエル・パレスチナ間で停戦合意が交わされました。「流血と破壊に対して世界が『もうたくさんだ』』というのに14ヶ月という長い月日がかかるとは想像もしていませんでした。全世界の目の前で繰り返されたジェノサイドは余りにも長過ぎました。」オリーブオイルの出荷団体の一つ、パレスチナ農業開発センター(UAWC)のファッド・アブサイフ代表がまさしく話した通りです。

しかし、停戦合意が交わされたのも束の間、西岸地区ではイスラエルによる軍事攻撃がこれまで以上にエスカレートしています。イスラ

エル軍は西岸地区の北部、特にジェニンやトゥルカレムの難民キャンプを中心に軍事作戦を展開し、4万人以上もの市民が住む家を追われ、帰る場所を失いました。また、西岸一帯で幹線道路や村の入り口に新たに複数の検問所が設置され、計900以上の検問所や道路上のブロックなどにより封鎖、移動が厳しく制限され、住民の日常生活や経済活動に大きな支障をもたらしています。

*1 OCHA(国連人道問題調整事務所)報告より
*2 パレスチナ農業省報告より



オリーブ収穫作業にきた農民を畑から追い出そうとするイスラエル軍(ナブルス県)

共同記者会見、声明に至るまで

これまでATJはオリーブオイルの民衆交易を通じて生産者に連帯してきました。しかし、2023年10月に始まったガザ地区への攻撃以降、イスラエルによる占領が続く限り、オリーブ生産者が恐怖と不安のない平和な暮らしを手にするにはないことを痛感させられました。オリーブオイルの消費者の皆さんからもガザ地区のジェノサイドを止めることができないもどかしさや無力感を訴える声が多数寄せられました。

1月末にはUAWCから緊急行動の呼びかけが送られてきました。私たちに何ができるか、ATJ、APLAIはパレスチナで活動するNGOに相談し、それらのNGOと一緒に「パレスチナの平和を求めるアクション実行委員会」を組織することになりました。そして「ガザの恒久的停戦と、パレスチナの平和を求める」声明を出して個人・団体から賛同署名を集め、日本政府がパレスチナの平和の実現に向けてあらゆる外交努力とアクションを行うよう、総理大臣や外務大臣に要請しました。また、3月28日には記者会見も行って状況を訴え、複数のメディアで報道されました。

ファッドさんからも賛同を呼びかけた際に熱いメッセージが届きました。「すべての賛同署名は、沈黙に抗う声であり、犯罪を拒否し、人間性を共有する行為です。パレスチナが求めているのは、哀れみではなく正義であり、涙ではなく声です。署名を、情報拡散を。そして立ち上がってください。安全保障、政治、沈黙の名の下に、今まさに虐殺されている人びとのために。」

ATJ、APLAIはオリーブオイルの民衆交易を通じて現地のパートナー、生産者とながっている団体として、現地の声を伝え、イスラエルによる占領・封鎖が終わるよう、共に取り組んでいきます。



UAWC代表
ファッド・アブサイフ

小林和夫(こばやし・かずお/ATJ)



ヨルダン川西岸地区への軍事攻撃やガザ地区における飢餓といった現地の危機的状況を伝える報告、メディアで報道された記者会見の様子はこちらからご覧いただけます。

オリーブオイル ATJレポート 🔍

